未接種者にも影響
接種者との接触で

「人に感染させたくない・・・」

自分が感染源となって周囲に迷惑をかけないようにとワクチン接種を考える人もいるだろう。動機は素晴らしい。しかし、そもそも新型コロナワクチンは感染を防ぐものではない。さらに、接種をする事でかえって周囲の人を危険に晒すかもしれないとしたら？

スパイクタンパク質自体に毒性
接種者の身体で作られ排出

ワクチン開発の先駆者ジョナス・ソーク博士が設立した米国サンディエゴのソーク研究所は4月30日、新型コロナウイルスの病原性はスパイクタンパク質にあるとする論文をCirculation Research 誌に発表した。スパイクタンパク質に囲まれてはいるが実際のウイルスは含まれない疑似ウイルスを作成し動物モデルに感染させたところ実際のウイルスが引き起こすのと同じ細胞損傷が確認されたという。研究チームは次に実験室において健康な内皮細胞（動脈を覆っている）にスパイクタンパク質を投与したところ、ACE2受容体と結合してミトコンドリアに対するACE2の分子シグナルが阻害され、ミトコンドリアが損傷を受けて断片化した。共同研究者のユリ・マナー助教授は「多くの人はこれを呼吸器系の病気と思っているが実際は血管の病気だ」と語った。

昨年カナダ政府から助成金を得て新型コロナワクチンの開発に携わったウイルス免疫学者のバイラム・ブライドル博士は5月27日のインタビューで、「私たちはスパイクタンパク質自体が病原性であると知らなかった。人々にワクチン接種をする事で、毒素を接種してしまう事になる」と述べた。

卵巣や精巣に集積

博士は国際的な科学者のグループとともに「生体内分布研究」と呼ばれる、ワクチンの主成分でスパイクタンパク質の設計図であるmRNAを包む脂質ナノ粒子が身体の中でどこに移動するかを調べるファイザーの機密研究の情報公開請求を日本の政府機関に対して行った。博士が入手したこの動物実験のデータによると、mRNAを運ぶ脂質ナノ粒子は血液中に入った後、脾臓・骨髄・肝臓・副腎などの組織、また精巣や卵巣にも非常に高い濃度で集積していた。

「血液中のタンパク質は全て母乳に濃縮される」博士はまた授乳中の乳児がワクチンを接種した母親からスパイクタンパク質を取り込む可能性を指摘した。

ニューヨーク市でホリスティック医療を行う小児科医ローレンス・パレフスキー博士はインターネットに動画を投稿し、接種した女性の流産や死産が何倍にもなっておりその周囲にいる未接種の女性も同様の経験をしていると指摘し、接種者の直腸や唾液にスパイクタンパク質が発見されている事から、接種者の汗や呼気からもスパイクタンパク質が放出されて周囲に伝播している可能性に言及。事実に基づく医療を主張する米国の医師団体アメリカズ・フロントライン・ドクターズも同様の警告を表明した。

mRNA技術の先駆者であるルイージ・ウォレン博士は、「接種者がスパイクタンパク質を排出するのは確かだ」と投稿した後にツイッター社にアカウントを停止処分された。

新型コロナワクチンのmRNA
DNAに組み込まれる可能性

マサチューセッツ工科大学と米国立がん研究所及びホワイトヘッド生物医学研究所の科学者達は4月19日、「逆転写された新型コロナウイルスRNAは培養ヒト細胞の遺伝子に組み込まれ、患者由来の組織で発現する」という査読付き論文を米国科学アカデミー紀要に発表した。これは新型コロナウイルスのRNAがヒトのDNAに統合されうるとした、昨年12月に査読前論文として発表された内容にさらなる証拠を提示したものだ。元の論文に懐疑的だった米国立がん研究所のヒューズ博士の提案により統合の真偽を判定する実験を行った。博士は「今回の研究は元の仮説を支持する」と言う。

この研究は新型コロナ感染者が回復後もウイルスのRNAを産生する可能性を示し、もはや感染が認められないにもかかわらずPCR検査で陽性になる例の説明となるほか、「mRNAはDNAに組み込まれない」とする一般に流布されている説明が事実でない事を示唆している。

生化学及び分子生物学博士のダグ・コリガン氏はブログ記事で、「ワクチンのmRNAは通常より長く安定して細胞に留まるよう操作されており、人のDNAに組み込まれる可能性もそれだけ増す。その結果自己免疫疾患を発症したり、もし生殖細胞に組み込まれて次世代に変異が引き継がれた場合には生まれつきスパイクタンパク質を自身が作りそれを免疫が異物と認識できないために新型コロナウイルスに脆弱な人が徐々に増える可能性もある。mRNAワクチンの安全性の確認のためにはより長期の研究が必要だ」と述べた。

世界の医師・科学者が警告
血栓、不妊、抗体依存性感染増強（ADE）

独マインツ大学・病理生物学及び衛生学研究所主任教授スチャリット・バクディ博士は昨年のブタペスト医学会議における講演で、T細胞による免疫と異なり抗体はすぐに減衰し、ウイルスに対して十分な量が無ければ効果の無い事を解説、抗体の有無で免疫を証明する事の無意味さを指摘した。T細胞の働きでほとんどの感染者が重篤化せず、破傷風など他の感染症と比べてウイルス量が多い事から、新型コロナに抗体を誘導するワクチンのメリットは無いという。

博士はまたインターネットに動画を投稿し、ワクチン接種が血栓形成の引き金になっている事がわかったとして接種しないように訴え、子供に接種させる事は犯罪であると述べた。

ファイザー元副社長兼最高科学責任者のマイケル・イードン博士は昨年12月、欧州評議会議員会議元衛生委員会長のヴォルフガング・ヴォダーグ博士と共に、全ての新型コロナワクチン研究の即時停止を欧州医薬品庁（EMA）に請願した。

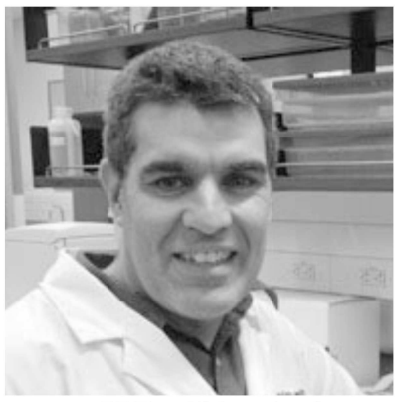
両博士は請願の中でこれらワクチンの安全性に対する重大な懸念として、非中和抗体の形成によって抗体依存性感染増強（ADE）が起き、サイトカインストームや免疫調節不全につながり重篤化の恐れがあると指摘、ADEはコロナウイルス類、特に新型コロナウイルスを含むSARS近縁のウイルスに特徴的な問題であり、これまで他のコロナウイルス類に対するワクチン開発がことごとく失敗してきた原因だと解説し、SARSワクチンを投与されたアカゲザルのみがSARSに感染した時に重篤化した例を示した。

不妊のおそれも

またスパイクタンパク質には胎盤形成に不可欠なシンシチンと同族のタンパク質が含まれているため、もしワクチンがシンシチンに対して免疫反応を引き起こすと不妊を生ずる可能性がある事なども指摘した。分子生物学者・毒物学者のジャンシ・チュン・リンゼイ博士も同様の指摘とともに米疾病予防管理センター（CDC）にワクチンの製造と流通の中止を求めた。

核心臓医学者のリチャード・フレミング博士は4月13日のインタビューで、新型コロナワクチンは炎症と血栓を引き起こし、スパイクタンパク質は血液脳関門を通過して、動物実験では狂牛病を発症したりレビー小体が生成されたと述べた。

HIVを発見しノーベル生理学医学賞を受賞したフランスのウイルス学者リュック・モンタニエ教授は、ワクチンが変異株の原因となり、またADEを引き起こしている事が各国の接種数と死亡数の時系列データから読み取れると述べている。



ワクチン開発に携わったバイラム・ブライドル博士は、「私たちは大きな間違いを犯した」と語った。

「接種者は雇用せず」

マイアミにある私立学校セントナー・アカデミーの共同設立者レイラ・セントナー氏は4月、「新型コロナワクチン接種者の体内からは何らかの有害物質が排出されており、これが女性の生殖機能や児童の正常な発達に悪影響を与える恐れがある」として接種者を雇用しない事を通知し、またすでに接種したスタッフについては児童から離れているように要請した。これに対し「接種者からウイルスが排出される事は原理的に不可能だ」との批判が主流メディアを通じて殺到したが、有害物質はウイルスとは限らず、実際に接種者の近くで過ごした人に健康被害が出た報告が相次いだ理由は依然として説明されていない。報告された主な症状は酷い生理痛、頭痛、嘔吐、ペットの死亡、ランダムな痣、突然の鼻血などの他、女性の不正出血、閉経後の女性や生理開始前の児童の出血、流産など。子宮内膜が剥脱して体外に排出されるdecidual castの頻発も報告され、16か月の女児は接種した祖父母と週末を過ごした後それを経験したという。同用語は接種開始後の今年1月に検索エンジンGoogleの検索回数で過去最高を記録した。日本でもツイッターなどで同様の報告が相次いだ。これらは非公式の情報とはいえ、市民が同時多発的にこれらを捏造する動機は考えにくい。

公式治験文書に記載

接種者の身体から何かが排出されているという懸念を裏付ける内容が、新型コロナワクチン治験の手順や規約を記したファイザー社の治験プロトコル文書に記載されている事がわかった。問題の部分は文書の8.3.5節にあり、特に問題視される部分の抜粋は以下。

「研究介入を受けているまたは中断した男性の参加者が受胎前後の配偶者に接触させた場合、流産や死産、出生後1か月以内の新生児の死亡などの深刻な有害事象があればその詳細を、無くても社に報告する事。」その他授乳婦に対する記載もあり、これらはそのような危険が理論的に存在しうる事をファイザーが認識している証拠だとして話題となった。これを受けて「これはワクチンのバイアルを破損したりして吸入したり直接触れてしまう場合について記したもので、接種者に触れたり同じ空気を呼吸したりする場合を指していない」との反論がなされたが、吸入や皮膚接触については治験参加者の家族や医療従事者についてのみ記載があり治験参加者に対しては書かれておらず、接種した治験参加者の男性には吸入または皮膚接触での危険は想定されていない事がわかる。

さらに、ファイザー社の他の薬品の治験文書を確認したところ、ここまでの内容の記載は無かった。これは特にこのワクチンについてこの種の危険について注意する必要があるとファイザーが認識していた事の証拠となる。

ワクチンの中身、知ってますか？

ファイザー：ALC－0315（工業用塗料に使われる腐食性の刺激物）、DSPC（急性毒性、発がん性、臓器毒性、生殖毒性）、塩化カリウム（注射によって動物の安楽死や死刑に使われる）他。モデルナ：SM－102（急性毒性、発がん性、生殖・胎児毒性、中枢神経・肝臓・腎臓・呼吸器障害）他。アストラゼネカ：ポリソルベート80（卵巣損傷、血液脳関門突破）、HEK293（遺伝子組み換えヒト胎児腎臓）他。塩野義：バキュロウイルス（昆虫を操りゾンビ化させる）他。